

第5章 座談会「地域に役立つ公民館にむけて」



これまでの章は過去を振り返るものであったが、本章はこれまでに振り返りつつ「より地域に役立つ公民館」になるための座談会を記録した。

今回の座談会にはこの地域の自治会連絡協議会長をはじめ、利用者みんなの会、消防団経験者、地元団体、PTA 会長経験者、生活支援コーディネーター経験者、子育てサポーター、地域の若者など幅広い知見を持った方に集まっていただき、自由に話し合った。今の地域、今の時代の課題を読み解くことから始め、これからの公民館のあり方、「より地域に役立つ公民館」への沢山のヒントをいただいた。

日時：令和7年3月1日（土） 9:00～12:00

参加者：齋藤 暁 さん（貞元地区自治会連絡協議会長）
佐々木 裕之さん（周西地区自治会連絡協議会長）
長谷川 和子さん（利用者みんなの会・唐椎読書会）
高橋 司 さん（君津地区青少年相談員・消防団員）
川口 心結 さん（周西南中学校3年生）
羽山 椿 さん（周西南中学校3年生）
吉原 瑞蘭 さん（周西南中学校3年生）

記念誌部会：福島義人（部会長）、齋藤みどり（副部会長）、船田兼司、増田久美子

公民館：平野陽一（公民館長）、布施利之、矢島堯

※齋藤さんが2名いるため以下、齋藤暁＝齋藤（暁）、齋藤みどり＝齋藤（み）と表記する。

（1）自己紹介

齋藤（み）：この座談会は、開館60周年記念事業の中で、文化祭も含めて実施しています。60周年記念事業のテーマが「60 祭 地域に役立て公民館」ということでやってきました。地域に役立てという視点で記念誌を作るのは初めてで、このような座談会も無かったので、ぜひ皆さんにはざっくばらんに話していただければと思います。かしこまったお話ではなく、気軽にお話ししていただけると中学生も楽にお話しできるかと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

福島：実行委員長・部会長の福島義人です。よろしくお願いいたします。



齋藤（み）：齋藤です。副部会長をさせていただきます。公民館と出合ったのは家庭教育学級という子育てのときの学習だったんですが、どちらかと言うと、PTA ってなんだろうとか、教育委員会ってなんだろうとか、自分がモヤモヤしたことを勉強させてもらいました。学生のときは勉強なんて大嫌いだったんだけど、ここに来て、勉強って楽しいなって思うようになって、ずっとここで勉強させて頂いています。陽光台に住んでいて、子ども会を立ち上げたりしております。

矢島：君津中央公民館の職員をしています矢島と申します。私自身は実は東京出身で、子どもができたのを機に、君津市へ引っ越してきました。社会人枠で市役所職員となり、今4年目です。公民館に勤めて3年になりますが、公民館のことが良く分かっておらずという状況です。社会人としての経験がありますので、そういった視点だったり、そもそも公民館ってなんだろうといった素朴なお話ができればと思っております。

船田：船田と申します。住まいは、「かつ波奈」の近くに住んでいます。10年前ぐらいに、周西小学校でPTA会長をやっていました。その他にこの周西南中学校区で、青少年健全育成連絡協議会の会長をしていました。あとは、「親子の会（おやじのかい）」や「まてばの会」に長く入っています。公民館との関わりは、何かの会議のときに部屋を借りる程度で、公民館の事業やサークルに直接関わったことはないのです、逆に皆さんに

いろいろ話を聞きながら、公民館ってそういうところなんだっていうのを学べればと思っています。



増田:増田です。私は君津に住んで23年ぐらいです。地元は鋸南町になります。公民館との関わりは、子どもが生まれて家庭教育学級に入ったのと、「子育てサポーターさぼっと」という傾聴ボランティアに入っています。公民館は20年ぐらい利用させていただいています。それ以外には、公民館運営審議会の委員に4年前から関わっております。それこそ「地域活性化するために地域の課題とはなんだろう?」とか、「公民館にこういうことをしてほしいと思うよ」というのを提案できる資料を作っています。子どもは21歳と19歳の男の子が2人で陽光台に住んでいます。何か私の関わること、何か発信できること、そういう視点で話をしていきたいと思っています。



平野:君津中央公民館長の平野と申します。私は専門職ではなく、一般職の行政事務として入ったんですが、公民館は、周西と清和と中央で働き、3館目になります。地域との関わりですが、私も子どもが周西南中学校に通っていて、令和2年、3年とPTA会長をやらせていただきました。ただ当時コロナで、卒業式も入学式も来賓を招くことがないため、2年間通して皆さんの前であいさつしたことは1回もないというような珍しいPTA会長でした。

齋藤(暁):貞元自治会連絡協議会の会長をやっています齋藤と申します。君津市南久保育ちの周西南中学校出身で、周西南中学校ができて一番最初に1年から卒業したという年代になります。今は郡に住んでいます。一度、別の市に行ったんですけど、やっぱり君津が一番バランス取れてるといえるのか、住みやすい街だったので、君津に住み直してきました。公民館との関わりについては、小さい頃は、近かったので結構利用した記憶はありますね。祭りとかもその頃公民館でやってたような気がしたんですが、最近は、文化ホールもできたりして、公民館の利用はしなくなってしまいました。市民の目線で話ができたらと思います。



佐々木:台の自治会長をやらせていただいています佐々木と申します。あと周西地区の自治会連絡協議会の会長もやらせていただいています。君津に来て30年以上経ちます。出身は岩手県の釜石市です。今年3月いっぱい自治会長卒業ということで、自治会館の中を色々片付けてましたら、この前お話しした内容の資料がありましたので持って参りました。ちょうど資料の中で中学生の方が書いた、3.11の震災のときの資料がありました。中学生の方に、ぜひ見ていただければなと思います。公民館との関わりは自治会長の他に自分のライフワークとして20数年やっているボーイスカウト活動で、毎月この公民館を借りて会議をやらせていただいているのと、文化祭ですね。お庭を借りて色々なイベントとボーイスカウト活動の紹介をやらせていただいています。今回この60周年記念誌ということで内容を見ていたら、非常に面白い内容で関心を持っていただいて、地域の輪がどんどん広がればいいなと思っています。



長谷川:私は秋田出身です。最近、毎日のように雪のニュースが流れていますが、ああいう体験は小さいときにしていますので、雪のことなら何でも聞いてください。それから、私は看護師です。定年まで君津中央病院で仕事しておりましたが、その後も、看護師不足などで要請が多く、未だに仕事を続けています。ほぼ55年看護師だけやってきました。その間に公民館の利用は、読書会と以前は卓球などやらせてもらっていました。あまり恩返ししておりませんので、今日はちょっと意見など述べさせていただいて、ちょっとだけ恩返ししようかなと思っています。



高橋:君津地区の青少年相談員の高橋と申します。皆さんの経歴がすごくて、どこから話したらいいかわかんないんですが。出身は鹿児島です。小さい頃から君津に居まして、結婚して子どもが生まれ、家を建てて郡に今住んでおります。郡地区は、公民館、自治会館がないので、公民館っていうのにはあんまり関わりがなかったんですが、今回青少年相談員をやらせてもらったので来るようになりました。その他にも消防団をやっている、だいぶ君津に染まってきてしまったと感じています。貞元小学校の学童保育のメンバーもやっていて、そのときにPTAの方々と話をする機会があって、そのつながりから消防団に入ったりとか青少年相談員をやらせてもらっています。

吉原:吉原です。周西南中学校の3年生です。公民館との関わりは、文化祭のボランティアで、去年からずっと関わらせてもらっています。



川口:同じく周西南中学校3年生の川口です。学校では生徒会をやっている、学校の事とかやって来た感じです。地域とは、この3人ともお祭りのお囃子をやっている、君津市大好きです。公民館とは、文化祭のボランティアもそうだし、「ぽんこつ村」という事業にも関わっています。あと休日に卓球したり、遊びに来たりしています。



羽山:羽山です。周西南中学校の3年生です。陽光台に住んでいます。私もお囃子とかやってるんですけど、今年から、公民館のお祭りとか手伝わせてもらっていて、今日この後も「公民館で泊まる」という事業を手伝わせてもらう予定です。図書館で勉強して気分転換に公民館でやるみたいな感じで関わらせてもらっていました。

(2) 今の地域、今の時代の課題について

齋藤(み):ありがとうございます。早速、座談会の方に入らせていただきます。最初に、今の時代、今の地域の課題について、いかがでしょうか？

高橋:地域の課題というか、今の時代に感じるのが、消防団の件なんですけど。僕が入ったのがちょうど10年ぐらい前で、今年で5期目が終わります。1期2年なんですけど、次の人がみつかりません。住んでないわけじゃないんですが、次の担い手や役員候補がいません。僕らの住んでる郡地区ですらそういう状況で、南の方は60歳に近い人がたくさんやっているそうです。こうなると組織としても成り立ってないですよ。

ね。市とか県も考えてくれてると思うんですけど、今いる人たちが抜けないようにする方法とか、新しく入ってくる人をどうやったら確保できるのかとか具体策がないともう限界に来てるんじゃないかなと感じています。

齋藤(み):ありがとうございます。良く耳にすることなのですがなかなか難しい問題ですね。自分の身近なところで何か課題だなと思ってる方いらっしゃいますか。

齋藤(暁):どこも同じだと思うんですけど、少子高齢化が進んでますので、空き家がちらほらあります。他の自治会でも聞かれるようになってきて、これからその空き家も大きな問題になってくるのかなという風に考えてます。

齋藤(み):全国的にニュースになってますが、身近なところで課題になっていますね。

佐々木:消防団のお話もされましたけど、自治会のメンバーもその通りですね。先ほど話したように自治会長を卒業しますが、自治会の役員の方の人選が非常に大変だと思います。自治会を辞めていく方が多くて、多分加入率 50%切っていると思うんですけどね。自治会活動への関心がない方が増えてきているという気がして、大変な状況だと思います。

齋藤(み):他に何か困っていることはありますか？ 中学生いかがでしょうか。

羽山:公園の遊具が減ってきちゃって、遊ぶ所があんまり無い。陽光台でも子どもの人数も減ってきているので、遊べる場所も少ないから、やっぱり遊具がないと外に出ようと思えないんじゃないかなと思います。

川口:久保に住んでいますが、中央公園があって遊びやすくなっているんですが、ボール禁止とか禁止事項とかがあって、遊ぶってなったら、ショッピングモール、イオンとかに行っちゃって、あんまり公園で遊ぶ機会が少なくなっているなって思いました。



吉原:うちはサッカー家で、みんなで普段サッカーをしたりするんですけど、この辺で一番大きい公園が中央公園じゃないですか。中央公園ってサッカー禁止なので、こちらで家族とみんなで遊べる場所がないと親が嘆いていたことを覚えています。

齋藤(み):記念誌の委員さんたちも何か最近の課題とかありますか？

船田:話を聞いてて思ったのが、昔は遊ぶ所とか結構いっぱいあったし、安心して遊べてた時代だったのかなっていう感じがします。変な人が出たりとか、あんまりなくて、自分が小さかった頃はあんまり気にせず外に出れたなと。友達も公園に行けばいっぱいいるし、おじいちゃんおばあちゃんはゲートボールやってるし、結構世代間でも交わることができたのかなって思いますね。あとお金持ってる子は商業施設とかに行けばいいんだけど、お金の無い子はじゃあどこで遊ぶんだみたいな、格差による遊び方の差がでているなと感じます。



増田：陽光台の公園もイノシシが出たとか、遊具がなくなったり使いにくくなっている気がします。あと散歩のときに挨拶しているんですが、近所の人なんだろうけど、挨拶をしても返ってこない。それこそ防犯のためって意識が自分の中にもあるのでちょっとさみしい。自治会に加入するけど、自分の生活スタイルに必要ないって言って抜けてしまう方もいるし、70歳以上の人は、班長やらなくていいってルールもあり、班長になる頻度が10年に1回だったのが5年に1回になったりしていて人数が不足しているのかなって感じます。あと、飲食店で仕事をしているのですが、中学生が食べに来てくれます。公園とか遊び場等で安心して過ごせる場所が無いのでこっちに来ているのかなって思ったりもします。皆さんの話を聞いていて公民館で遊べるっていうことの情報発信が弱いのかなって感じました。



長谷川：1年間みんなの会の役員をやらせていただいて一番感動したのが、布施さんが講師の「お泊まり避難所体験」だったんですね。市役所の方が防災のことを説明してくださり、君津市が防災に力を入れてるんだってということも良く分かりました。とても良い内容だったので、もう少し宣伝をして公民館がこういうことやってる、こういう備えをしようと市民に知らせた方がいいかなと思って、私あちこちで話して歩きました。季節ごとの体験とかそういうのもいいかなと思いましたので、ぜひ続けていただきたいと思います。

矢島：時代の課題として、なんか失敗がしづらい時代になってきたなと感じます。失敗がしづらいついていうのは、少しでも間違った発信をしてしまったり、何かその配慮が不足してたりしていると一斉にみんなから叩かれるから、自分でなにかやることにハードルが高くなっているのではないかと感じます。自治会や消防団でも責任ある立場というのはそういう意味でも担い手が不足している気がします。

台の回覧板（清掃の様子）

佐々木：自治会の活動として、毎月、自治会議事録を回覧板で配ったんです。自治会で何をやってるか、伝えたいことは何なのかを整理して伝えたかったんですよ。はっきりいって大変でしたけど、みんなで自治会をつくってこうって思ってもらえるようにね。



9月は震災のあった月なので、私の生まれ故郷の3.11の災害について紹介したんですね。救われた人は救う人になるという、岩手日報の記事について紹介しました。震災のときに、皆が手を差し伸べてくれたということが心に刻まれて、「救われた人が大人になったら救う人になりたいよ」っていう作文です。自治会をやっていく中で、そういう絆とか繋がりとか、しっかり保てればなと、そう思っています。

福島：昨日たまたまコミュニティ・スクールの研修に参加していたのですが、その中で、その地域の中学2年生がパネラーで出てたんですね。正にこのことを話していました。

自分たちも能登の被災地に行って、今度は能登の人が自分たちのところに来てもらう。そういう交流をして、お互いが救う・救われる、そんな関係をつくっていて非常にいいなと感じました。私は周西南中学校区の学校運営協議会委員をやっています。その活動で朝7時ぐらいから8時ちょっと過ぎまであいさつをしています。賛同して

くれる人も多くないのですが、学校や公民館、地域がつながってそういう輪が広がるとよいと思います。私が自治会長をやっていたときは学校の先輩後輩の関係があって、消防団なんかも一本釣りしてって話もあったけど、やっぱり地域がなんらかの仕組みで支援していくというのにも必要かなと思いました。

矢島:福島さんには申し訳ないんですけど、そういうのがある意味プレッシャーになってないかなっていうのも、危惧するところがあって…。肯定的に関わってくれてる人達に仕事が一極集中してしまうような形になっていないでしょうか。



先ほどの高橋さんの話のように、やってくれる人に話が行きやすいのかなと。そういうことが地域離れの一環になっている気がします。

私は東京の団地に住んでいて自治会っていうのを本当に知らなかったんですよ。当時は何をしてる組織か分からず、なんとなくニュースとかで見るとは、なんか大変そうだってイメージしかなかったですね。公民館で自治会の皆さんと話していると地域の事をよく考えてくれてるし、そういうことじゃないんだなっていうのが分かったんですけど、漠然とした距離を感じていました。

佐々木:自分が育った環境は、お祭りもあるし自治会のいろんな行事があって、その上下関係とか横の繋がりとかが大切で、その中で育てられた気持ちがあったんです。

そういうのを次世代に繋げていかなきゃいけないなと思ってのるんですよ。昨年初め、自治会の組編成、班編成もあったもんですから、バーベキュー大会やったんです。班ごとにバーベキューのテーブルを囲んだり、あと PTA の方を通じて子ども達に夜店とかやってもらったんですよ。終わった後に自治会館で集まって、小中学校の親御さん達とお話ししたら、「すごく楽しかった」「来年もやりましょうよ」「私たち手伝いますよ」って。そこだと思うんですよ。世代の色々な繋がりを持っていく活動が必要なんじゃないかなと思います。

長谷川:私も自治会で役員をやったことがあります、自治会長さんの雰囲気随分変わりますよね。明るく社会性のある動きができるととても良いですね。自治会連絡協議会とか会長さんの集まりのときに、楽しいレクリエーションとか今風の子どもの遊び方とかを自治会長さん達が学習するっていう場面を作っていただいた方が地域の人たちが協力してくれるきっかけになるんじゃないかなと思います。

佐々木:こういう資料を作るにしても家族で話になるんです。「こんなことしてしまうと次の人大変よ」って。でも自分のポリシーとして、自治会がどういうことしているか関心を持っていただくための資料は作るべきだなと思って作ってきました。あと、周西の自治会長連絡協議会では課題を共有したりする機会が少ないです。やっぱり自治会長が集まって膝を交えて、困ってることを話しながら、「こういうことを市に提案していこうよ」ってできるのがいいですね。先ほど公園のお話もありましたが、中野東公園の改修工事で遊具を新しくしてもらってますけど、あれも私が入ってからで、約5年かかりました。ちゃんと物を申す市民になっていかなきゃいけないと思います。

齋藤(暁):自治会はやらなければいけないことと任意的にやることがすごく混ざっているんですよ。ゴミ捨て場への参加とか、その辺は絶対やらなければいけない義務で、

その他にやらなくてもいいことっていうのはボランティア活動とか、寄付金とかですね。それらがすべてやらなければいけないことになってしまっているのが問題を複雑化している気がします。そこを分けていく必要がありますね。やるべきところはやる、その代わり寄付は、家庭の事情に応じてできますとか、そういう誰もが選んで参加できる自治会っていうのを今後つくっていくかなければいけないと思います。

郡地区は、皆さんが膝突き合わせて、そういう話し合いをします。それでだんだん変わってきています。自治会は変えることができます。それこそ、若い方がやりやすい形になっていくんじゃないかなと思ってます。

齋藤(み):きちんと物を申す市民になっていくっていうのは公民館で教わってきたことだなんて聞いていました。課題はある程度出たかなと思いますので、次に移ります。公民館の課題、それから公民館への期待について、お話しいただければと思います。

地域の課題に何か公民館にできることはないでしょうか。「こういうことをやって欲しいけど全然やってないよね」みたいなことでも構いませんので、何かありますか。

(3) 公民館の課題、公民館への期待

矢島:最近公民館に中学生と小学生がたくさん来るんですよ。去年辺りからどんどん増えている気がします。昨日は自転車があふれてしまうくらい来てくれました。色々要因があると思うんですが、中学生の皆さんの意見を教えてもらえればうれしいです。

吉原:小学生が今週4時間で終わりなんです。寒いとか、小学校の隣の大野原公園も弟を迎えに行くとき本当に人が溢れて遊びづらいみたいなことがあって、皆公民館に来るんです。私も公民館で卓球したり、皆でお話ししたりしてるんですけど、最近マナーがなってない子が多いんですよ。自転車もすごいバラバラに置いてたり、駐車するところでもないところに置いてたり。館内でも、大音量で音楽流したり歌ったりTikTok撮ったり。なんかすごい周りに迷惑がかかってるかなって感じました。

羽山:知名度が上がってきましたね。周西南中学校の中だと結構行く人も多いし、小学生でも、駅前のマンションに住んでる子とかが来たりしてるっていうのはよく聞きます。公民館で「こういうことをしてるよ」っていうのは皆知っていて、そういうのがあってなのかなと思いました。あと友達がいるから、その友達に来てまたその友達に来ての連鎖もあるのかなって思いました。

川口:さっきみたいに、うるさかったりすると勉強とかもできないのかなって思いました。なんか自習室みたいな形で分けたらいいなと思います。図書館でもテスト前になると人が溢れちゃったりして、勉強しづらくなっちゃうので、公民館に来るんですけど。TikTokとかの人がいると勉強しづらくなっちゃうから、そういう人たちと部屋が分かれているといいなと思います。



佐々木:私が用事で公民館に来たときも一生懸命勉強されてましたね。今お話しにあったような、騒いでる方とかいなくて、ああ、非常にいい光景だなと思ったんです。あとはそういうマナーが悪いことをやってるときに、同年代同士で注意とかってできないと思うので、昔の頑固親父みたいに大人が関わっていくっていうのもいいと思い

ますね。ただどうですかね。そういう人が入って来たらうざいとか嫌だなとか思いますかね。そうなるに関わり方ですかね。矢島さんなんか、だんだん距離を詰めて話ができるような雰囲気になればいいんでしょうね。

矢島:昨日そういうことがあったんですよ。2階の廊下でサッカーやってたんです。さて、どう注意しようかなと思って手で×印を作りながら「はい、分かってるね?」って言って終わり。でもそれでやめたんです。自分たちが悪いことやってるんだよなっていうのは子ども達も分かっていたね。ただ、わいわいお菓子食べながら勉強するみたいなのも駄目ではないんです。線引きは必要かもしれませんが、コミュニケーションを取ったりする場所でもあるので、図書館とはちょっと違うのかなって思います。

齋藤(暁):郡地区はちょっと遠いので、疎遠になってしまってるんですけど。実際何をやってるのか分からないっていうのがまず第1なんですよ。

文化ホールのイベント情報誌がありますね。あの案内が公民館からも出てれば、使いやすいのかなって思います。今年100年後芸術祭があって内房アートフェスで八重原公民館で展示したと思います。そういうのを中央公民館でやっていただければ、市民が市役所を利用した際に寄ったりするんじゃないでしょうか。そうじゃない限り、我々みたいな遠いところに住んでると、中央公民館っていうのは、なかなか使う機会がないっていうのが現状ですね。近さが1番重要になってくると思います。

高橋:今の話ちょっと補足すると、うちの子も郡地区なんで多分ここに来たことってほとんどないと思うんですよ。皆さんのお話にでてくる子ども達もこの辺の子たちだろうと思います。そうなる周西地区専用の公民館になってんじゃないかなと僕は思うんです。だからうちの子たちや近所の子たちも公民館行ったなんて聞かないし、そもそも何やってるか分かんない。郡からちょっとここまで来ようと思うと結構大変。やっぱり遠いよねえ。例えば小学生は無料でコミュニティバスに乗れるとか、そんなのがあれば少しは使うかもしれない。なんかそういう風に参加しやすくなればいいなと思ってます。

今日、青少年相談員の宿泊イベントがここであるんですけど、貞元小学校の子って少ないんです。人数比もあるんですけど、それに比べても少ないんで。「なんか遠くでやってるイベントなのかな」ぐらいにしか思ってなくて、あんまり公民館が身近じゃないという感じですかね。

齋藤(み):分館の近くにコミュニティセンターがありますが利用しないんですか?

高橋:貞元コミュニティセンターも自由に使える部屋もありますが、そこに行こうっていう気にはならないですね。誰もいないですからね。たまに自治会の人たちが卓球やったりとかしてますけど。子どもが集まるところって公園ぐらいしかないんですけど。

さっき言った通り「公園ではサッカー駄目だよ」とかといろいろとあって。じゃあ道路でやってると今度はボールの音がうるさいとか、子どもの声がうるさいとか。それって地域で子どもが育つのかなって思いますね。今じゃちょっと騒いだら学校の全校集会事案だと思うんですけど、そういう寛容性がなくなってきた気がしますよね。地域でボール遊びをやっちゃいけないっていうくせに遊ぶ場所もないと。

福島:私も民族の大移動でこっちにきて、大和田の団地に住んでたんですよ。大きな団地ですからその間にグラウンドがあって、子ども達も砂場とかいろいろ遊ぶ場所があったんですよ。我々は3交代で仕事してきましたから、夜勤の方もいるし朝出ていく人もいるし、昼出る人もいる。そういう形で夜勤の方は昼間寝ますから、あんまりうるさいというのは確かに苦情が出たときはあったけど、寛容だった。昔の大人と子どもの関わりというか、あの頃は「どうやって地域みんなで助け合おうか、子どもを育てよう」という雰囲気があったと思います。地域で子ども達を育てることができるような雰囲気が欲しいなあと思いますね。

齋藤(み):他に公民館になにか期待したいことはありますか。

羽山:最初の方に核家族世帯が増えてるって出たと思うんですけど、やっぱりおじいちゃんとおばあちゃんが老人ホームに入ったりする人もいて、関わる機会があんまりないんですよ。同世代の子がいないから行かなくていいやって思っちゃう子も結構いるんですよ。だからさっき地域全体で子育てっていうのも言ってたんですけど、そもそも地域とあんまり子どもが関わってないかなって思います。

世代の違いって、嫌な部分もあるから、「違うよね」って諦めちゃうところもあると思うんですけど、それがまたネタになったりもすると思うので、昔の人の話とか私は結構好きなのでそういうイベントとか開いていくしかないんじゃないですかね。

佐々木:公民館でいろんなことやっていますよね。趣味の会とか。もうちょっと広げてなにか集まれるような仕組みにしたらいいと思うんですよ。

うちの家内も最近、手芸に凝ってるんだけど、そこでいろんな人との触れ合いとかね、繋がりとかできるし。そういうところにも年代の差を超えて入れるような、広報活動っていうかね。何かしてあげればいいんじゃないかなと思うんですよ。自治会の中でもお年寄りと子どもの触れ合いっていうので、囲碁将棋の得意なおじいちゃん集めて、お子さんと呼ばうっていう話も出たんですけど、なかなか来ていただく方がなくて難しいですね。

そういうところで、年代差を超えて地域の繋がりでできれば、お子さんの教育にもなるし、お年寄りの健康維持にもなるし、ボケ防止にもなるんじゃないかなと。

齋藤(み):中学生の皆さんは、もし声が掛かったら行くかなって感じ?

羽山:うん。声が掛かったらって感じだし、さっき手芸って言ってたと思うんですけど、今、手芸流行ってるんですよ。私たちの世代で。だから編み物得意な人とか居たら、そういうのを開いても多分来る子はいれると思う。

齋藤(み):そうなんですね。そういうところをキャッチできてないんですね私たち。さっきボランティアにも参加してるってことだけど、やったことがないものと、あるものどっちが魅力的なのかな?

羽山:やったことなくてもなんか面白そうな何か昔の遊びとか、あんまり知らないんですよ。学校でやったりはするけど授業でやるだけなんです。かるた、めんこぐらいしか知らないんです。そういう昔の遊びっておもしろそうだなっていうのは思ったりす

るけど、知らない人と「チーム組んでやりましょう」とか言われると嫌だなんていうのが強いのかもしれない。

齋藤(み):それも仲間で楽しめるような感じで持っていくといいんだね。だんだんヒントがいっぱい出てきましたね。ありがとうございます。一緒に中学生いかがですか? 何かこんなものがあたらいいのにな。地域でも、公民館でも。

川口:他の小学校とか中学校の人たちと関わる機会が少ないというか、ほぼ無いので関わりたい。お年寄りの方も、挨拶する程度で、挨拶も少なくなってきたぐらいなのでもっと関わりたい。あと私も全然、将棋とかもルールも知らないぐらいなので、教えてもらえたら一緒にできるかな。

吉原:会話することが減ってきたので、お年寄りの方も小学生とかも皆一緒に遊べる場所が増えたらいいのかなって思います。



福島:生活支援コーディネーターって言ってね、高齢者の方たちが困ってるようなことを手伝いしたりする仕事をしてたんですよ。やっぱり公民館とかそういうところにね、高齢者と皆さんたちが一緒になって交流できたらいいなと思うんです。核家族でなかなか家の中で3世代とかいうのは少ないですよ。だからこういう場で、独り暮らしのおばあちゃんとか、おじいちゃんと交流を図るなんていいですよ。

齋藤(み):最後に公民館や地域のあり方についてと書いてありますが、先ほどの続きで、「こうなったらいいな、今後こうしていきたいな」というような、期待を込めて、公民館のことや地域のことについて、皆さんから色々なご意見を伺いたいと思います。

(4) 公民館・地域の在り方について

長谷川:一緒にやれるって言ったら、草取りなんかいかがですか。老人たちだけ集まって草取りしてるんですよ。「みんなの会」で年に1回公民館を利用している人が集まって草取りしてます。子どもさん達が何か一緒にやりたいのならどうかなって。

齋藤(み):そうすると、子ども達に参加できる日程に変えていけばいいってことですよね。子ども達も参加しやすいように変えていくのも大切ですね。60周年記念のテーマである地域に役立つ公民館になるためにといった視点ではいかがでしょうか。

増田:地域にアンケートを取ったり意見を聞いたりすると、孤立している方が多いという話があります。独り暮らしの人がいたり、退職されて時間はあるけど外に出る機会がないなんて方もいらっしゃいます。例えば提案が得意な方がいて、子ども達に講師をお願いすると自分が任されてる感じがしてすごく嬉しいと思うんです。

いつも1人で誰とも喋らない人が、若い人と関わるきっかけになるといいかなと思います。そうなったときにどういう情報を出すとキャッチしやすいのか、どんなイベントなら1人じゃない状態や外に出やすい環境になるのかを教えてもらえると嬉しいです。

齋藤(み):その情報をキャッチしやすいのかっていうのは、どなたにお聞きしたい?

増田:若い人と働いてる現役の方ですね。うちの主人も、自分が公民館に行く必要がないから行かないって言うんです。子どものイベントで公民館に行く用事があるから「パパも一緒に行こうよ」ってなれば行ったと思います。自分から率先して何か行く必要がないからっていうことも言ってたので、どういうイベントだった行きたいのか、教えていただけたらなと思って思います。

川口:紙だと見なかったりする人がいるから携帯になっちゃうかなと思います。携帯を持ってる人が多いんで、SNS、インスタは、情報を得やすいし。あと学校のホームページを見てる人は結構いるので、そういうのがあると私としては見やすいし、キャッチしやすいかなって思いました



高橋:それって結局フォローしてなかったら一緒じゃない。SNS 発信もいいんですけど、君津市公民館をフォローしないと来ないんで、中学校に上がったと同時に QR コードを伝えとかどうでしょうか。君津市の安全メールは登録してる人多いと思うんで、あんな感じもいいですね。情報が自然と届く環境ができたらいいいのかなと思います。あと、我々世代の女性は

フリマ好きですよ。キッチンカーとか。ただ、キッチンカーも最近高いんで、金額も小学生とかをターゲットにするなら激安で何か売り物してくれるんだったら小学生も多分たくさん来ますし、親御さんもついてきますね。そこで何か別のイベントも一緒にやっちゃうとか楽しそうですね。

矢島:私も 20 代、30 代だったときここに来てるかなって考えてみると多分来てないですね。何しに来たらいいか分かんないのと、デートで別の所に行っちゃうとか。仕事で忙しいから一杯一杯って感じですかね。万一、使うなら「安い居酒屋的な感じで使っていていいよ」ってなれば、交流の場としてっていうのはあったかもしれないですね。

高橋:でも公民館って、市の職員じゃないですか。土日もやっててね、素晴らしいと思います。土日開けてるとこなんて聞いたことないし、しかも朝早くから夜結構遅くまでやってるし。だからたくさんの方が知って利用できるといいなと思うんです。

消防団にあんまり入らないとか、青少年相談員も担い手がいないっていう 1 つの理由としてパパが家族として子育てに参加する時代になった感じがします。

「消防団に行かなきゃ」って言ったら、奥さんから何言われるか分かんない。入った時点で離婚騒ぎになるぐらい。子育て熱心な方も多いので、親子で参加できるようなイベントがあれば良かったかなとは思いますがね。小学生ぐらいまでですかね。中学生だったらもうあんまり親と一緒に来ないですからね。

齋藤(み):情報キャッチの仕方っていうのもありますけど、それは大体若い人には SNS しか無さそうな感じですね。いつまでも紙に頼ってちゃいけないのかな。

齋藤(暁):自治会にいるような年配の方は回覧板が一番いいですね。

佐々木:私もこの資料作るときに閲覧板にしたんですけどね。話聞いたら、スマホは持ってるけど使えない人もいます。まだまだしばらくは紙ベースだろうなと思います。

ただどちらも一緒にやらないと広がらないですよ。あとは口コミですよ。口コミでそういう話をしていただけて、何か関心を持って頂いたらいいですね。こうグッとね、ハートをつかむような発信の仕方を知りたいですね。

齋藤(暁):ちょっと質問なんですけど、公民館は誰でも利用できますか。極端な話突然利用してもいいんですか。子どもがいきなり来て遊んでもいい場所なんですか。

矢島:当日ここの部屋を貸してくださいっていうのはできないですよ。ただ、ロビーにあるようなフリースペースや卓球台などは空いて入れば利用いただくことは可能です。お金稼ぎをここでやるみたいなことについては基本的には駄目なので制限はあります。君津市の皆さんはもちろん市外の方も使っていただけます。

齋藤(暁):普段職員さんもいらっしゃる安全な場所でしょうから、そういう場所で、常に帰れるおばあちゃんの家のように開かれていれば多くの方が利用するんじゃないでしょうか。多分市民の皆さんがわかってないというか。予約でもしないと入れないんじゃないかって思われてるんですかね。

佐々木:今ネットで予約も取れやすくなりましたしね。あとは毎年やってる文化祭。コロナで下火になったかなっていう感じあるので、グッと盛り上げていけるといいですね。他にもフリースペースにおもちゃとか充実させたりできないんですかね。

矢島:子ども達が自由に使える場所は2つありまして、1つは「こっこる一む」です。小さいお子さん達が使えるようなエリアで、そこにはおもちゃが自由に取れるようになってお使いいただけます。もう一つはロビーのフリースペースで、卓球台を常設していますが、ボードゲームやおもちゃは常設してないんです。ただ事務所に来てもらえれば貸し出ししていますので子どもたちはどんどん取りに来て遊んでいますね。

齋藤(暁):先ほど、昔の遊びをしたいって話がありましたが、コマとかけん玉とかをやりたいっていう希望があるのでしょうか。何か子ども達だけじゃなくてここを利用している年配の方もそれを使って遊んでいたら、ふれあいができるかもしれないですね。「こうやってやるんだよ」みたいなことを教えてもらってね。フリースペースをもう少し有効活用できたらいいのかなと。

高橋:さっき発信の話がありましたけど、簡単でもいいのですが動画じゃないと駄目なんです。文字だと見ませんしね。しかも TikTok 並みに短くしなくちゃいけないですね。ざっと分かればいいんです。チラシを PDF で送られても多分見ないですね。

増田:若い人達には SNS 動画で発信。そしてお年寄りには閲覧板。でも閲覧板だと自治会の方しか回らないですよ。自治会に入っていない方にはどうやって来てもらえるのかとかありますか。

佐々木:そこが自治会をやってる中で問題なわけですよ。先ほどのゴミ問題もそうなん

ですよ。自治会に入らない方はそういうイベントにもあんまり関わりたくないんです。自治会に入ってる意味がない。何か自分に返ってくるものがあるのかっていう感覚で入られるんでね。だから非常に難しいですよ。簡単に言うとゴミ問題でも結局入ってなくても市のゴミ袋を有料で買った捨てる権利はあるんだよねって。ただし、市には「皆一箇所に集めて管理してください」という風に言われちゃう。ゴミを捨てなきゃいけないから自治会に入んなきゃいけないなと思ってる方が大体6割7割いらっしゃるんですよ。支援とか援助とか求めて入ってる方は少ないですかね。

齋藤(暁):皆さんに自治会は入って貰いたいですね。自治会には有益な情報もありますし、それが分かって頂ければ加入に繋がると思うんですけどね。

佐々木:そのための発信としてこういう回覧板というか、議事録を作ってやったんですけどね。新しく入会する方にも、一応自治会で独自に入会の手引きみたいのを作って活動の紹介をしています。つい最近3、4ヶ月のお子さんを連れて一戸建ての家を買われた方がいらっしゃったんですね。「子どもが泣くんで迷惑だと思うんですけど」という挨拶に来られたんですよ。「いや、とんでもない」と。「昔はね、あちこちから子どもの声とか泣き声がしてね、少し賑やかでもいいですよ」と言ったら、「どうもありがとうございました」と挨拶されました。

福島:新築を買って若い方が入って来られても自治会に入らない方が多いです。全体で見ても加入率が50%切りました。自治会に進んで入る方が少ない。これは本当由々しき問題です。できるだけ入ってくださいとお願いしていますけども。やはり何のメリットがあるかというような方が多いですね。

齋藤(み):そういう課題がある所で、公民館が地域に役立つためにはどうしたらいいかを皆さんからご意見いただければと思います。

長谷川:私、1年間「みんなの会」の役員やらせていただいて感じたことなんですけど。「みんなの会」が主催するイベントが6回ぐらいありますよね。あの6回のイベントを「どうして公民館がやらないでみんなの会がやるのかな」とずっと1年間疑問に思っていて。

知名度で言ったらみんなの会よりも断然公民館主催って言った方が市民に対するインパクトも強いわけで、「施設見学を公民館でやります、皆さん行きませんか?」って言った方が集客率高いんじゃないですか。ああいうイベントは公民館主催って言った方が分かりやすい。

齋藤(み):私も「みんなの会」の役員をやっていますので、皆さんからそういったご意見もいただきます。他に公民館がこうしてくれたらいいなとかありますでしょうか?

川口:部活動でも吹奏楽部とか演奏する機会が少なくて、こういうところで聞いてもらえたりすると自信にもなるし、曲とか発信力がすごくあると思う。合唱コンクールもやってるから、聞いてもらうことで知ってもらえるのかなって思いました。

増田:聞きたいですね。なかなか聞けないですよ。子ども達がやってるっていうのは

知っていますが、なかなか学校行けないですしね。

船田:今の時代の課題とか、公民館の課題とか、皆さんの色々な意見を聞いていて思ったのが、公民館に行ってみようとか、気軽に行けるような場所に、まずはならないといけないなっていう感じがします。意外とびっくりしたのが、若い世代から高齢者の方と交わってみたいって話もあったんで、この公民館自体が、人の交わりの場であったり、歴史とか文化とか情報とか交わる拠点だったりするといいですね。

多分皆さんそれぞれ色々な知見を持ってるから、そういったものが交わるような場所になっていけばいいと思います。ただそのためには行ってみようと思える場所じゃないといけないかなって。そもそもどんな場所かっていう情報を皆が広く取れるようなことが大事なのかなと思います。さっきお話にあった「こっこる一む」も利用してみたいですね。

齋藤(み):「こっこる一む」は初めて知ったんですか？

船田:そうですね。改めて考えると公民館のこと。あんまり知らないですね。

利用者が固定化されてるようなイメージがありますね。そのサークルしか行けないのかなとか、気軽にこう立ち寄れるっていうような感覚がなかったので、今度からは利用してみようかなって思います。

あとは世代間の歴史とか文化的な話がありましたが、災害のときは世代関係なくみんな必要になる知識・情報をここに集めて世代を超えて伝えられたりとか、そういった地域に役立つ機能も大切だと思いますね。気軽に遊びに来れるのもいいけど、情報とか防災であったりとか世代を超えて交わる、情報交換できるような場所があればいいのかなと思います。

齋藤(み):郡地区は離れているので、高齢者の方はわざわざここに来るのにも車の足がないとかそういうことがあるかもしれません。例えば、公民館が近くの公会堂などに行ったらイベントをやってくれればなんて声は上がらないんですか。

齋藤(暁):高齢者の方も免許返納してる方は少ないですね。自分に関心のあるニッチなところはすごく興味があって車運転してでも来ると思います。ですから、多岐に渡ってイベントを企画していただければいいですね。あと来ていただく場所がないんですよ。郡の杜地区は公民館も自治会館もないんですよ。

齋藤(み):自治会館もないんですか？

齋藤(暁):郡の杜地区はなくて、一番近いところがコミュニティセンターになるんですけど、歩いて行ける距離ではないですよ。すぐ近くに本当にほしいところですね。我々はなんか羨ましいぐらい。課題とかって話ができること自体が羨ましいです。

齋藤(み):私からすると不公平って思っちゃう。近いから利用できるけど、遠い人はどうするのって。せっかく市の施設ですもんね。大体、自治会館ってどこも持ってらっしゃるのかなと思ったので、場所が無いのはちょっとびっくりでした。

齋藤(暁):無いのですが、民間の方のご好意でアパートの一室は借りることができています。ただ、そこもいつまで借りられるか分からない状況なんです。

福島:公民館運営審議会委員を3期やってるんですけど、公民館を使ってもらうために色々と提言したり、先ほどの高齢者と若い人たちとの交流の場を設けてもらうとか話してきました。

もう一つは、先ほどの自治会館とか、青年館とか色んな施設が、地域にありますから、そこに公民館からどんどん行ってくれっていう提言なんかもしてきてましてね。2、3年前ぐらいから、公民館職員が自治会館とかに出て行って、色々と情報を収集したりとか、色んなことをやったりとかしてもらってるんですよ。今後も続けてほしいですね。

また、生活支援コーディネーターっていうことやってましたので、若い方と交流できるような、そういう場も作ってほしいと思います。我々は支援者に対して、どういう施設がある、どういうものがあるとか、毎年資料を作って皆さんに配っていたのですが、公民館も情報を収集して連携ができると良いと思います。

長谷川:そういえば周南公民館にお邪魔したことがあって、そのときにたいそう賑やかに高齢者の方たちが集まって、すごい楽しそうに過ごしていたのが印象的です。

矢島:おそらく市民の皆さんが主体となって行っている周南の「ほっとサロン」という事業だと思います。

長谷川:すごくいいイベントですよ。うん。すごく明るくて、楽しくて、皆賑やかに過ごしてましたよ。こういうのがあちこちであつたらいいのになあーって思います。こういうことを市民の皆さんに任せるのではなくて公民館主催で出張する、あるいはここでもやるっていうふうにしたらいんじゃないですか。



齋藤(み):全部が全部を職員がやると、職員数も限られているので難しいですね。昔は運営者に対する学習活動をすごくしていたんですよ。それが無くなってきて、どちらかというとサークルで借りているだけって人が多くなっているのかなと思います。いつも職員に頼るのではなく、住民が力をつけるために職員が頑張ってくれるといいなって思っています。

佐々木:リーダーになる方の養成講座っていうか、そういう教育の場であることをしてほしいってことです。そうですね。だから先ほどから問題になったように社会情勢も変わって、パワハラ、セクハラ、コンプライアンスの問題もあるだろうから、そういうことを学べる場が公民館にあるとよいですね。

齋藤(み):チラシにイラストを入れるのにも、使用料を払わされるような事例もあって、「ここまで確認すればちゃんと使えるよ」って教えてもらえるとか。そういう知識の場があるといいですね。時々やってはくださるんですよ。著作権の勉強をしたいと言ってやってもらったりもするんですけど、参加者もあまり集まらなかったり…。市

や社会福祉協議会でもやっていますが、それをキャッチして出て行くっていうのがなかなか無いかもしれないですね。良かれと思ってやったことが恨まれてしまって、その人のやる気がなくなっちゃうということは避けたいですね。

佐々木:私も資料を作る中で、顔写真とか気を付けています。毎年うちの自治会の中で、小学校に入られる1年生をお祝いしてるんですよ。そのときに家族の写真を撮って、「地域で育てていきましょうよ」ってピカピカの1年生の紹介していたんですが、言われたんです「写真出しちゃまずいだろう」って。でも本人に確認したら「うちは写真断ります」っていう方はいらっしゃらない。逆に撮ってくださいよって。心配のしすぎですかね。先ほど話していた学べる場でこういう情報も共有できるといいですね。

福島:南地区の社会福祉協議会でやっている「ふれあいサロン」の話ですが、5地区の情報をLINEで流すんですよ。どういうことをやってるか、写真を流して共有します。そうすると「じゃあ俺たちもこれやろう」とか、やり方を変えたりできるので非常にいいですよ。

矢島:知らない人や関心のある人達へのアプローチはイメージが湧いてきましたが、公民館を知って関わり始めた人がより参加してくれる、また地域に関わってくれるようにするためにはどうすればよいでしょうか。

齋藤(暁):利用してくれるというか、来てくれる方が1番。そこに尽きると思うんです。こうやって若い方が来てくれて、それで来てくれた方に有効的に使っていただく。迎え入れる環境っていうのを常に取りつていき、それで来た方が口コミで広げてくれたり、親御さんを連れてきたりとか、そういうふうに広がっていくものだと思います。とりあえず、情報発信して、門戸を開いて、まず実行していただきたい。それでその後は、その成り行きを見て考えればいいんじゃないかなと私は思います。利用する方は若い方中心になるのでおもちゃなど環境を整備してもらえると良いですかね。

佐々木:文化祭の小さいバージョンを実施してはどうでしょうか。あと「おもちゃ病院」などを定期的にやっていることをもっと広報すれば、技術を持った高齢者の生きがいにもつながると思います。修理したおもちゃを使うことで物を大切にすることにもつながると思います。手芸のようにとっつきやすいところから始められるといいですね。

船田:青少年やPTAの視点からお話ししますと、今子ども達の安全な居場所が少なくなっているの、子どもの居場所となるようなスペースになると良いですね。

また、中学校のキャリア教育で将来の進路の話をしていると思うんですけど、公民館にはいろいろな知見を持った人達がたくさんいますので、それを活用してはどうでしょう。

例えばこの中にも長谷川さんは長年看護師を続けていますし、福島さんは新日鐵や関連会社、地域の事業所などでいろんな仕事の体験もされていた。そんな方にどうやったら看護師になれるのかとか、どうやったら出世できるのかとかいろいろなことを聞けると思います。地域のことも公民館にあればいろいろと教えてくれるでしょうから、皆さんの力をお借りするのもいいかもしれません。消防団っていつも仕事しているのにどうやって日中の消火活動しているのかとか、そもそも消防団って地域のため

になにやっているのかとか。そういう教育的なこともできるのではないのでしょうか。

格差がとても広がっているのも、誰もがそれを活用できるのはとても大切だと思います。担い手の話ではないですが、救われた人は救われるとの話がありました。いろんな人に聞いて教えてもらったことは次につなげたいと自然に思うのではないのでしょうか。そうしたつながりが新しい担い手になって次の世代につなげるきっかけになるのではないのでしょうか。

齋藤(み):格差の話がありました。公民館が無料でありがたいですね。ずっと続けてもらいたい。

川口:公民館があることが当たり前になっている。いい環境だから使わないともったいないし、若い人たちのいろいろな声をもっと聴いていきたいし、お年寄りから学ぶだけではなくこちらからも発信していきたい。

福島:キャリア教育について去年から事業所に連絡をとってやっているが、公民館のつてを使ってやる考え方は非常に面白いですね。

川口:私も仕事に興味があって、学校の授業だと時間の限りもあってゆっくりと話を聞くのが難しい。こういう機会にいろいろと深く聞けるのはとてもいい。やりたい!

齋藤(み):話も尽きないところですが、終わりの時間が近づいてまいりました。最後に「地域に役立て公民館」ということで、皆さんから一言いただければと思います。

高橋:公民館を普段あまり利用してないので言えることも少ないですが、中学生たちがボランティアに興味をもっていて偉いなと感じています。高校生になると忙しくなり、手伝う子が減ると思いますが、この先も大人になっても続けたいと思える何かメリットを感じられる場所になってもらえるとよいと思います。

長谷川:「ほっとサロン」をやってもらいたい。あんな楽しいゲームをしたいですね。ぜひやってください。

佐々木:今回座談会をやっていただきましたが、定期的にこういった会を開いていただき、みんなで話をしながら問題を解決できるとよいと思います。

齋藤(暁):こういう会を開いていただき感謝しています。こういうことを続けていただき、今後も熱意を持って子ども達に関わってもらいたいと思います。

増田:自治会とのかかわりや連携を密にできるとよいと思います。情報をもっと幅広い方に発信してもらい、孤立したお年寄り、公民館に来られない方へのアプローチをしっかりやってもらえるとよいと思います。

また、働くママたちが情報共有できる場として家庭教育学級を復活させてほしいです。でもそのためには職員の不足などは課題に感じています。地元に着した連携をして、誰も取り残されないような場所になるといいですね。

船田:座談会に参加して世代を超えていろいろな話ができ本当に良かった。またこういう機会があれば良いと思います。

矢島:場所も大切ですがやはり人が大切なんだと痛感させられました。その人として心地良い関係性にならないといけないですね。まずはたくさんの方と知り合って顔見知りになることからスタートだと感じました。

福島:こういった座談会を継続していく必要があると思います。公民館の職員に負担をかけすぎないように我々地域のメンバーが中心となって企画をしたりできるとよいですね。そして地域のいろいろな団体との関わりを大切にしていきたいです。

困っている高齢者の情報共有など個人情報もあるので市役所の関係課とも連携しながら孤独な高齢者を見逃さないようにしていく必要があると思います。公民館と各団体のつながりを強めていきましょう。

齋藤(み):楽しいことから人が集まるのもよいですが、これを行動に移せるようなきっかけづくりをしてもらえるといいなと思います。



布施:私は異動で3年前に10数年ぶりに中央公民館に帰ってきました。当時は台風やコロナなどで地域との距離が離れていましたが、仲間たちと協力してようやく少しずつ公民館が地域に戻ってきたと感じています。しかし、話を聞いていて反省したのは、公民館がまだまだ届いていないところがある。まだまだ公民館が知られていないということに気づかされました。そもそも働いている職員が公民館をわかっているのかももう一度考えなくてはいけないと感じています。公民館の「公」はおおやけという字を書きます。それ以外にも「幸」や「広」、そういった公民館もいいと思いますが、敷居が高い「高」や「硬」という公民館にしたくないですね。今回の記念誌のタイトルは「変」です。変えなくちゃいけないこと、変えてはいけないことの両方を見つめ、変幻自在・臨機応変の公民館を地域の人と作っていきたいと思います。

平野:本日はお忙しい中お集まりいただき貴重なご意見ありがとうございました。公民館としては自治会をはじめいろんな方とのつながりを大切にしていきたいとの想いで様々なことに取り組んでまいりました。その結果として、一昨年の文化祭から地域の祭保存会の方々に力を借りて、地域の方にも「こういうお祭りもやっていますよ」といったことを周知していく意味合いも込めて縁日を実施しました。また、そこで若い世代がボランティアとして協力してくれて、そういうつながりがどんどん広がり、公民館が地域の中心となっていていろんなつながりができていく。最終的にはそういった形が理想的ではあります。

ただ、それは急には広がっていきません。小さな一歩でも踏み出す、その繰り返し結果として大きな一歩になっていく。ただそれにはたくさんの時間がかかるので、年々積み上げていき広げていければよいのかなと個人的には思います。

その積み上げをしていくのに今日は皆さんからたくさんのご意見をいただきました。その中にあるたくさんのヒントを公民館運営に活かしながらやっていければと考えています。また、こういった機会を少しずつ設けていきたいと思いますので、その節にはご協力よろしくお願いいたします。